

ぼうしの詩人賞

水に融けゆく魚等の

尾
魚
に
浮
か
ぶ
血
液
の
模
様
。

実存の輪郭に触れるたび

脆
い
幻
想
に
呆
れ
て
い
る
。

幻想の柔軟さを抱き締めるたび

尖
つ
た
実
存
に
怯
え
て
い
る。
。

見えないもの

視
入
る
も
の
。

酸素の勾う山脈と

苺色した夕焼けの、

は
ざ
ま
を
満
た
す
夏
の
聲

隙間に流る暗黒物質。

素敵な私

知らない私、

いつか逢えたら

手をつなごう。



「山はまほうつかいだ」

ゆ田小学校 三年 田ぶち 陽仁

山はまほうつかいだ。

山にのぼっているところつかれる。

もうのぼるのをやめようと思う。

だけど、ぼくはまほうをかけられて、

ちよう上までがんばるぞと足がうごく。

木がかけをつくり、風がせ中をおしてくれ
る。

木のおい、土のおいにする。

風がきもちいい、葉っぱたちの話し声がす
る。

ところもわくわくして、足がうごく。

ちよう上についた！

きつかった。でもたのしかった。

またのぼりたいというまほうにかかった。

くもりの日

大殿小学校六年

中内 咲耶

空を見上げると探したくなる

おもしろい雲ないかなあって

雨が降るとうれしくなる

水のつぶが飛んでるなあって

太陽が光ると楽しくなる

温かい光に包まれるなあって

空を見上げると虹が出ていた

この時間がずーと続けばいいなあって



山口市立小郡中学校

一年
四
組

番

浅野陽佑

水
面

7	魚	に	な	り	た	い	し
---	---	---	---	---	---	---	---

水面の下でさけぶ海
僕の願いを聞いてくれ

僕は変わらず人間だ

波に抗う魚のやうに

一生懸命にすすみた

僕はなりたい
い
い
一つも
気楽に泳ぐ
あ
い
つ
に

僕はなりたいたい
魚さかなをもちつあいつに

こ	こ	か	ら	た	し	て	く	れ
---	---	---	---	---	---	---	---	---

せ
ま
す
ぎ
る
町
に

あ
き
た
ん
だ

争いだらけのよこれた
世界……

青い海の中は
平和で美しいんだろ？

[illegible]

や
っ
ぱ
り
僕
は
人
間
だ

黒い大地の土にうつる影をみて思う

フ	魚	に	な	リ	た	い	な	あ	に
---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

[illegible]

一年
四組
一番
(淺野陽佐)

[illegible]

海

山口大学教育学部附属山口中学校

三年 有吉 みなみ

夏のある日

一人浜辺に立っていた

しきりに吹いて肌にバタつく潮風が

私の輪郭を浮き彫りにするようで

それから逃げるように

私は歩き出した

波打ち際には

引いた波の冷たさはまだ残っていた

波は

もう何も語る気はないというように静かで

訳もなく愛しかった

海水を両手でそっとすくう

それでも海は

さっきと変わらぬ青さで波をうっていた

海が青くなくなるまで

私は何度呼吸をしなけれ
ばならぬだろうか

両手の中の小さな海は

もう青くはなかった

ぼくの妹

小郡南小学校

三年

清水

秀剛

ぼくの妹ついてくる。

ところ、ところ、

ついてくる。

台所、お風呂、トイレにも、

いつでもどこでも、

ところ、ところ、

ついてくる。

あれ、ついてこない。

さがしてみると、

三時のおやつ時間。

こんどは、ぼくが、

ところ、ところ、

妹といっしょにおやつ時間。

陽	日
𠂔	𠂔
登	登

ふ
と
う
の
ふ
と
う
の
ふ
と
う
の
う
の
う

アキサバの「キサバ」の「アキサバ」の「ア

きのみのきのみのきのきのみのき

もうあき
た

今はまだ

大内南小学校 六年 田中 莉咲

あなたが今好きなものは何。

好きかず々と続くとは限らない。

風かひと度ふけばゆれ、

嵐か起きると

あっけなく消えゆくかもしれない。

でも、今はまだ好きなまま。

きらいかず々と続くとも限らない。

今はきらい。

でも、今という時間はすぐに過ぎ、

未来かやってくる。

私は未来を、今はまだ知らない。

明日の私は何を好きになるのだろう。

64

山口市立小郡中学校

一年 三組

六番 (加藤千織)

楽譜がおわる

加藤 千織

楽譜がおわって 指揮がとまる

指揮がとまって 息がとまる

息がとまって 音がとまる

響きだけが残る

そのわずかな一瞬が

私の胸をおどらせる

山口市立小郡中学校

一年六組 十八番 (庄司ルカイヤ)

君と僕だけの秘密

教室に僕の居場所はない

いつも一人ぼっち

明日の朝、死ねるかな

今日も地獄が終わった

気持ち悪い、何も感じない

ふと振り返ると綺麗な青い目の黒猫がいた

細い路地へとにげて行く

僕はそれを必死に追いかける

もう、どのぐらい走ったろうか

気がつくとは僕は全く知らない場所にいた

空気が美味しくて緑豊かな場所

こんな美しい場所を見たことなかった

黒猫さんが僕をつれて来てくれたのかな

今までいた黒い世界に光がさした

「このことは君と僕だけの秘密だよ」

無花果										山口市立湯田中学校 一年 又野 衣織									
青い小さな無花果が										うるさいほどなっている									
「木に登る蟻の行列を落としてやる。」										そんな恐ろしさを秘めた鈴なりの実									
バラバラになった心が										川に流される									
悪魔の心が芽ばえる										メキ メキ メキ									
木のつるがわたしの心をしめつける										ゴジラのようにあはれた									
人道雲を破壊する										十三歳の夏のこ									